

【地域活性化フォーラム】

保育士資格、幼稚園教諭免許を目指す学生に対し、SDGs に関する啓発活動を行った際の意識調査および SDGs 普及活動プログラムに関する一考察 ―岡崎市を拠点とする国際 NPO 法人と協働して―

岡崎女子大学 宮腰宏美

要 旨

本研究は、保育者・教育者養成大学における、SDGs の啓発活動を通じた参加学生の意識調査及び SDGs 普及プログラムの提案を行うことを目的としている。調査の結果、89.4%の学生が SDGs という言葉を認知しており、70.9%の学生が SDGs の内容を知っていたことが明らかとなった。また、SDGs の普及を行うプログラムの提案として、経験者による講演や参加型の活動が効果的であることや日本において行うイベントの際に、参加する学生の国際的視野の拡大を狙う場合には、外国人との触れ合いを推奨すること等が挙げられる。

1. はじめに

岡崎女子大学の学生の多くは、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指しており、それぞれの資格の取得に向け、日々学修に励んでいる。近年では、保育士資格や幼稚園、小学校の教員免許取得に加え、インクルーシブ教育士の学内資格取得を目指す学生も多く見られる。ユネスコの「Education Sector Technical Notes Inclusive Education」(2013)¹⁾にインクルーシブ教育とは、学生とコミュニティの多様性及び様々な必要性と能力、特徴、学習期待を尊重し、あらゆる形態の差別を排除しながら、すべての人に質の高い教育を提供することを目的とした継続的なプロセスであり、特に、貧しい人々や排除・疎外されている人々、先住民族、特別なニーズを持つ人々に全ての恩恵がもたらされるように、焦点を当てているほか、少女と女性、学校に通っていない子ども、社会において恵まれない状況に置かれている人々の教育への参加と学習への障壁を取り除くことに重点を置いていると記されている。インクルーシブ教育士の学内資格取得を目指していない学生も、将来教育者になることを鑑み、ユネスコが上述している世界の状況を知ることが教育者、保育者となるにあたり、必要な知識ではないかと考え、筆者の専門ゼミナールにおいては、世界における教育問題や貧困問題について「世界がもし 100 人の村だったら」(池田, 2001; 池田, 2006; 池田, 2017; 開発教育協会, 2020)を題材に学習し、2021 年度の 5 月には、岡崎市を拠点とする特定非営利活動法人ゴスペルエイド⁽¹⁾(以下、ゴスペルエイド)代表の佐藤美香氏に、ネパールのバディ族⁽²⁾の子ども達への支援についての講義を頂いた。このような学習を通し、12 月の岡崎女子大学の教育フォーラムでのスタンプラリーイベント等に向け、スタンプラリー参加の 1~4 年生に向けた事前の啓蒙活動を行うための SDGs ポスター作成を行った。

2. 先行研究

(1) SDGs における政府のアクションプランについて

2015 年に国連で採択された SDGs は、2020 年に行動の年を迎え、日本においても企業及び各自治体などで取り組みが行われている。「SDGs アクションプラン 2021」には、2021 年

に実施する政府の具体的な取組の重点事項が盛り込まれており、日本政府が優先課題として定めた 8 つの課題は「1. あらゆる人々が活躍する社会・ジェンダー平等の実現、2. 健康・長寿の達成、3. 成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション、4. 持続可能で強靱な国土と質の高いインフラの整備、5. 省・再生可能エネルギー、防災・気候変動対策、循環型社会、6. 生物多様性、森林、海洋等の環境の保全、7. 平和と安全・安心社会の実現、8. SDGs 実施推進の体制と手段」(SDGs 推進本部, 2020, pp. 4-5)²⁾であると述べられている。

上記 8 つの優先課題の中の「1. あらゆる人々が活躍する社会・ジェンダー平等の実現」には「あらゆる人々の教育機会の確保」という中分類があり、小分類として「特別なニーズに対応した教育の推進」「外国人児童生徒等への教育の充実」「夜間中学の設置促進・充実」「生活者としての外国人に対する日本語教育の推進」「女性の多様なチャレンジに寄り添う学びと社会参画の推進」が定められている(SDGs 推進本部, 2020, p. 10)³⁾。

SDGs と ESD との関わりについて、「SDGs アクションプラン 2021」における「2021 年の重点事項」の IV. 一人ひとりの可能性の発揮と絆の強化を通じた行動の加速には、「子供の貧困対策や教育のデジタル・リモート化を進めると共に、持続可能な開発のための教育(ESD)を推進し、次世代への SDGs 浸透を図る。」(SDGs 推進本部, 2020, p. 3)⁴⁾と明記されている。ESD は、世界における課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことで、課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習や活動を行っていくことであると文部科学省は(2021)⁵⁾説明しており、上述したアクションプランでは、ユネスコのプログラムとして 2005 年から開始されて 2014 年に終了した ESD を継続的に行っていくと述べられている。

(2) 保育者・教員養成系大学におけるSDGsの認識や国際理解教育の取り組みについて

田爪と高垣(2019)⁶⁾は、教員養成大学の学生135名に対しSDGsについての認識を調査したところ、大学生のSDGs に対する関心度は、認知度に比べて低かったものの、学生の生活に身近な社会福祉分野についての関心が高かったことを報告している。また、田爪と高垣(2020)⁷⁾は、教員を目指す私立の女子大学生33名に対しSDGsに関する講義を8回行った後、質問紙調査を行ったところ、SDGsに対する関心及び認知度は、「平等・公正」についてのものが高く、SDGsに関する取り組みのイメージとしては「福祉・教育」についてのものが強かったと述べている。更に、企業におけるSDGsの取り組みについての講義を行った後には、ジェンダー平等や世界の貧困などに関心の高い女子大生が視野を広げた。SDGsの活動を行う際には、SDGsの話題について並列に取り上げるのではなく、学生がより身近に感じるトピックを主に取り上げることで学生の興味や関心をひくことができると考えられる。

山中と畠中(2006)⁸⁾の保育者養成大学における国際理解教育授業での取り組みの結果によると、国際理解教育を体験した学生61人中90%の学生が「自分が国際理解を深めることは、保育者として必要だと思う」ということに対して肯定的な回答をしている。また、1996年のユネスコの報告書の中には、現代社会で自らを取り巻く環境の種々の側面を理解するようになれば、知的好奇心が旺盛になり、批判精神が刺激され、独自の判断力をもって、現実を直視することができるようになろう、と書かれている旨を畠中と山中は報告している。

3. 研究の目的

本研究は、保育者・教育者養成大学における、SDGs の啓発活動を通じた、学生の SDGs に関する意識調査及び普及プログラムの提案を行うことを目的としている。

4. 対象と方法

(1) 調査対象について

研究対象は、3 者おり、1 者目が岡崎女子大学の 1～4 年生の学生、2 者目が岡崎女子大学子ども教育学部の筆者専門ゼミナールを受講する学生、3 者目がゴスペルエイド及びバディカフェ⁽²⁾の方々であった。

対象者 1 は、幼稚園教諭免許状、保育士資格、小学校教諭免許状の取得を目指す子ども教育学部に所属する私立の女子大学 1～4 年生の 159 名である。

対象者 2 は、筆者の専門ゼミナールを受講する 3、4 年生である。授業の中では「世界がもし 100 人の村だったら」の本を扱い、国際協力、開発教育について学習したほか、後期授業では、SDGs に関するポスターを作成し、学内の 7 号館に 11 月から 12 月の 1 か月間貼り出した。

対象者 3 は、ゴスペルエイド及びバディカフェの方々であった。代表の佐藤氏には、12 月 7 日(火)の講話後に質問紙調査を行い、岡崎市を拠点として活動する NPO 団体代表という立場から見た、大学との関わりについて質問した。

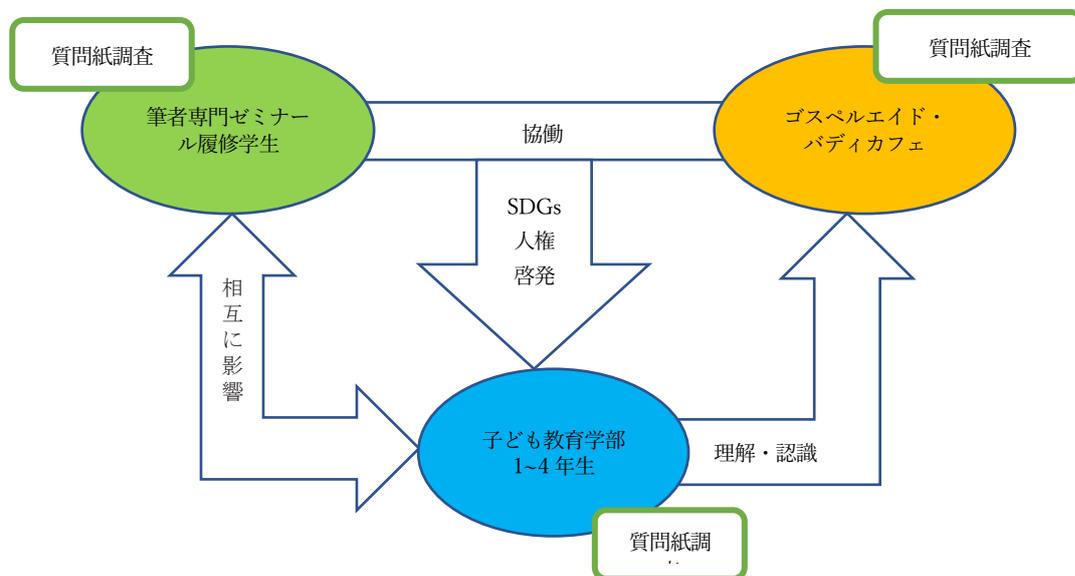


図 1. 本研究にかかる調査及び影響についての相関図

(2) 研究方法について

研究期間は、2021 年 7 月から 12 月の 6 ヶ月間であった。

研究方法は、対象者毎に異なる。対象者 1 の SDGs スタンプラリー参加者には、スタンプラリー後に、質問紙調査を行った。

対象者 1 向けに、11 月より SDGs1、2、3、4、5、6、および、このまま地球温暖化対策を何もしなかった時の 2100 年の地球の姿に関するクイズのポスターを、岡崎女子大学・岡崎

女子短期大学7号館の1階と3階に、それぞれ60枚程掲示をした。ポスター掲示期間中、2年生と3年生が実習のため、2年生は2週間、3年生は3週間不在であったことから、実質的に、2年生は3週間、3年生は2週間程がポスターを見ることができる期間であった。1年生と4年生は、5週間程ポスターを見る機会があった。

対象者1の2、3年生に対しては、12月5日(日)に行われた岡崎女子大学の教育フォーラムにおいて、筆者の専門ゼミナールの3年生6人がSDGsスタンプラリー、SDGsに関する概要、ゴスペルエイドやバディカフェ、バディ族、未来の教育者としてのSDGsに対する学生の考えについてなどを10分間程話したり映像を流したりした後に、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学の2号館の1、2階を使用し、SDGsスタンプラリーを行った。

対象者1の1年生は、筆者が担当する英語Ⅱの中で、英語の長文内容に沿ったSDGsに関する学びを毎回10分程とっており、英語Ⅰから受講している学生は、SDGs1~14まで、英語Ⅱから受講している学生は、SDGs5、6、7、9、11、12、13についてSDGsの内容を動画や活動を通して学んでいる。SDGsスタンプラリーは、English Indicator2という一般英語教科書の全ての読解を読み終わり、SDGs14までを学んだ後に、授業内で行った。

対象者1の4年生は、SDGsスタンプラリーを行う前に、ゴスペルエイド代表の佐藤氏に講話を頂いた。また、スタンプラリーの直前に、筆者が簡単にSDGsについての説明を口頭で行った。

対象者1の2、3年生対象のSDGsスタンプラリーは、筆者ゼミナールの3年生6名と4年生8名が問題の出題者となり、回答者が間違っても正解を教えた後に、スタンプを押す形式や、各スタンプポイントに、7号館の1階と3階に掲示してあった移動式掲示版のポスターを設置し、答えが分からない場合には、ポスターから答えを見つけてもよいという方法をとった。

対象者1の1年生及び4年生対象のスタンプラリーでは、ゼミの4年生が出題者となった。

対象者2は、筆者の専門ゼミナールの学生であった。後期が始まってすぐに、1回目の質問紙調査を行い、スタンプラリーの準備が終わった後に、2回目質問紙調査を行った。3回目は、SDGsスタンプラリーが全ての学年で終了した後に行った。

対象者3は、ゴスペルエイドの佐藤氏とバディカフェスタッフの方々であった。4年生を対象としたスタンプラリー後に質問紙調査を行った。

(3) 質問項目について

対象者1への事前調査の項目は、(1)昨日までに、SDGsという言葉を知ったか(2件法) (2)昨日までに、SDGsの内容について知っていたか(2件法) (3)昨日までに「SDGsの内容について知っていた」人は、どこでSDGsを知ったか(複数回答可) (4)昨日までに「SDGsの内容について知っていた」人は、どの程度知っていたか(4件法) (5)今日のイベントを通して、新たに知ったこと(複数回答可) (6)今、SDGsについて、どの程度、簡単に説明することができるか(4件法) (7)今回のSDGsイベントで、今後のSDGsへの関心がどの程度変化したか(4件法) (8)今回のSDGsイベントによって、SDGsに関することを調べてみようと思ったか(4件法) (9)今回のSDGsイベントによって、自分でも何かSDGsに関することに取り組んでみようと思ったか(4件法) (10)岡崎女子大学の学生として、やってみたい取り組みやプロジェクトなどについて(自由記述) (11)SDGsに関して、個人としてどういった取り組みができるか(自由記述) (12)今回のSDGsイベントについて率直な感想(自由記述)であった。

対象者2への1回目の質問紙調査項目は、(1)希望職種 (2)国際社会の現状(国際社会における貧困や教育の問題、その他)についての知識について(4件法) (4)国際的な感覚に関する視野はどの程度あるか(4件法) (5)今回の活動に、どのようなことを期待するか(自由記述) (6)ゴスペルエイドの佐藤さんたちとどのような連携を期待するか(自由記述)であった。2回目の質問紙調査項目は、(1)希望職種 (2)国際社会の現状(国際社会における貧困や教育の問題、その他)についての知識について(4件法) (4)国際的な感覚に関する視野はどの程度あるか(4件法) (5)イベントを準備する中で、ためになったことや学んだことについて(自由記述) (6)今回のイベントの実践で、参加する岡崎女子大学の学生に期待すること(自由記述)であった。3回目の質問紙調査項目は、(1)希望職種 (2)国際社会の現状(国際社会における貧困や教育の問題、その他)についての知識について(4件法) (4)国際的な感覚に関する視野はどの程度あるか(4件法) (5)今回のイベントを実施して、ためになったことや学んだこと(自由記述) (6)参加者の様子(自由記述) (7)今回のイベントは、就活や就活後の人生に、プラスな影響を与えたと思うか(4件法) (8)今回のイベントは、就活や就活後の人生に、どのような影響を与えたか(自由記述) (9)今回のイベントを通して、もっと学んでいきたいと思ったこと(自由記述)であった。また、佐藤氏の講義後に、対象者2である4年生には、岡崎市にあるNPO法人ゴスペルエイド代表佐藤美香氏のお話をお聞きした感想(自由記述)をお願いした。

対象者3のゴスペルエイド代表佐藤美香氏、バディカフェスタッフの方々には、「大学生にこういった活動などを通して関わっていく意義についてのお考えをお聞かせください」という自由記述をお願いした。

5. 結果と考察

対象者1の回答数は159で、1年生が29、2年生が58、3年生が41、4年生が25であった。記述に不備のある18を除いた有効回答141を分析した。

対象者2の回答数は、3年生が6、4年生が8の計14であった。

対象者3の回答者は、ゴスペルエイド代表の佐藤美香氏ほか3名の計4名であった。

(1) SDGsに関する認知度について

SDGsという言葉の認知度を知るため「昨日までに、SDGsという言葉聞いたことがありましたか」という質問を行ったところ、「ある」と回答した学生は、全体(n=141)の89.4%であった。学年別では、1年生(n=25)が96.0%、2年生(n=55)が89.1%、3年生(n=36)が80.6%、4年生(n=25)が96.0%であった。9割近くの学生がSDGsという言葉聞いたことがあり、昨今のSDGsという単語の認知度の高さが明らかとなった。

「昨日までに、SDGsの内容について知っていましたか」という質問の回答については、全体(n=141)の70.9%が知っていたと回答した。学年別では、1年生(n=25)の92.0%、2年生(n=55)の70.9%、3年生(n=36)の55.6%、4年生(n=25)の72.0%であった。1年生は、英語Ⅱの授業の中でSDGsを扱っているため、内容を把握している学生の割合が非常に高かった。

SDGsの内容について知っていた人(n=102)が、どこでSDGsを知ったかという質問(複数回答可)の回答は、大学の授業が54.9%、テレビが34.3%、高校の授業が31.4%、学内に貼ってあるSDGsに関するポスターが18.6%、その他が18.6%、インターネットが16.7%、中学の授業が10.8%であった。学年別では、1年生(n=23)は、大学の授業が91.3%、高校の授業が47.8%、学内に貼ってあるSDGsに関するポスターが21.7%、テレビ及びその他が4.3%

であった。中学の授業及びインターネットという回答は無かった。2年生(n=41)は、高校の授業が41.5%、テレビが39.0%、大学の授業が24.4%、その他が19.5%、学内に貼ってあるSDGsに関するポスターが17.1%、インターネットが9.8%、中学の授業が7.3%であった。3年生(n=20)は、大学の授業が70.0%、テレビが40.0%、インターネットが35.0%、学内に貼ってあるSDGsに関するポスターが20.0%、高校の授業が10.0%であった。中学の授業とその他に関する回答は無かった。4年生(n=18)は、大学の授業が61.1%、テレビが55.6%、インターネットが33.3%、学内に貼ってあるSDGsに関するポスターが16.7%、高校の授業及びその他が11.1%であった。中学の授業という回答は無かった。

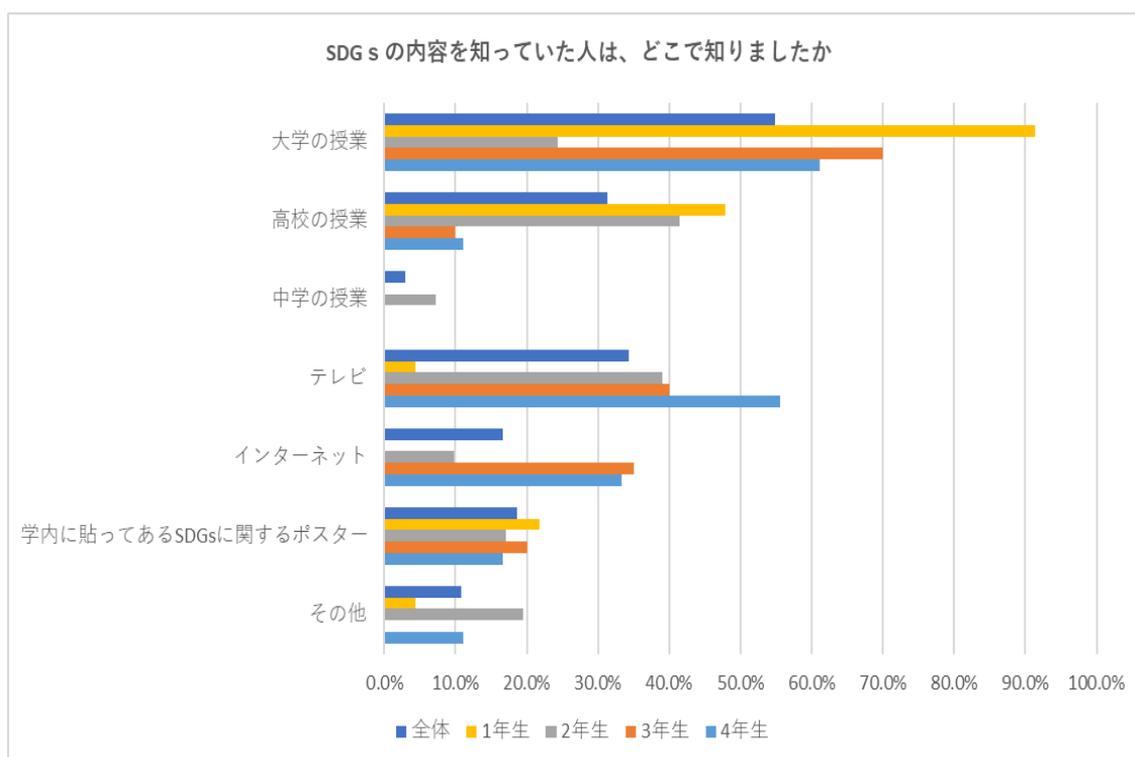


図2. SDGsの内容を知っていた人がどこでSDGsを知ったかについて

昨日までにSDGsの内容を知っていた人は、1、3、4年生において、大学の授業を通してSDGsの内容を知ったという回答が最も多く、大学のカリキュラムとして、SDGsそのものに関する授業科目はないものの、特に3年生と4年生においては、筆者以外にも授業内でSDGsを取り上げている教員がいることが明らかとなった。SDGsを軸として、他の科目との連携をとることにより、より深みのある学びを学生に提供できるのではないかと考えた。

上述した大学の授業に次いで、テレビ、高校の授業、学内掲示したSDGsのポスターが高い結果となった。高校の授業は、学年が若い程、SDGsを学んだ割合が高くなっていることから、近年各高校においても、SDGsに関する内容に取り組んでいることが推測される。学生はZ世代であるが、インターネットよりも、テレビを通してSDGsの内容を知る機会を得ていた。「その他」には、家族や親からという記述が見られるなど、SDGsなどの時事問題については、家族と一緒にテレビを見る中で情報を得ている可能性がある。「その他」の他の内容としては、新聞、本、家にあったポスター、看板、ガールスカウト活動、本、大学での活動、高校の学園祭等が挙げられていた。

学内に貼ってある SDGs に関するポスターと回答した学生は、全体の 18.6%であり、掲示を見ることができた時間に関わらず、どの学年も 20%前後であった。ポスターを読んでもらうためにクイズ形式で作成したが、ポスター1枚の大きさが B5 と小さかったことや、全て合わせた枚数が 60 枚程、と多すぎたことが問題の可能性として考えられる。また、筆者がポスターの近くにいる学生の様子を見た際に、近づいて内容を読もうとする学生が少なかったことや少数ではあるが、今回の試みにおいて、一定の効果が確認されたことから、今後啓発活動としてポスターを使用する際には、読んでもらうための工夫が今後の課題となる。

(2) イベント内での学びについて

141名の学生のうち、SDGsの内容について知らなかった学生は39名、うち1年生が2名、2年生が14名、3年生が16名、4年生が7名であった。

SDGsの内容について知らなかった学生が、今回のスタンプラリーイベントの中で学んだことは、順に、「SDGsは目標が17あるということ」(74.4%)、「ネパールのバディ族について」(74.4%)、「バディカフェが岡崎市にあるということ」(69.2%)、「SDGsは細かい目標が169あるということ」(59.0%)、「SDGs1の『飢餓をゼロに』」(53.8%)、「SDGsは地球温暖化や環境への取り組みだけではなく、様々な事柄への取り組みがあるということ」(51.3%)、「NPO法人ゴスペルエイドが岡崎市にあるということ」(51.3%)、であった。50%以下のものは、「SDGs5の『ジェンダー平等を実現しよう』」が48.7%、「SDGs3の『すべての人に健康と福祉を』」が46.2%、「このまま何も対策をしないと、2100年には地球温暖化が進むこと」が46.2%、「SDGsという言葉やエスディージーズという読み方」が43.6%、「SDGs2の『飢餓をゼロに』」「SDGs4の『質の高い教育をみんなに』」が41.0%、「SDGsは、誰でも身近な生活の中で実行することができること」が35.9%、「持続可能な開発目標という日本語名」が33.3%、であった。

SDGsを知らなかった学生は、SDGsの目標が17あること、細かい目標が169あること等、基本的なことについての学びと、バディ族やバディカフェ、ゴスペルエイドについての学びが最も大きかった。4年生がn=7とかなり少数ではあるが、バディ族についての学びが100%と、実際にゴスペルエイド代表の佐藤氏に講話をして頂いたことのインパクトが大きかったことが伺われた。4年生の結果を抜いた1~3年生の結果では、多かった順に、「SDGsは目標が17あるということ」(61.5%)、「ネパールのバディ族について」(56.4%)、「バディカフェが岡崎市にあるということ」(53.8%)、「SDGsは細かい目標が169あるということ」(48.7%)となり、上位の変化に変動はなかった。

表1. 佐藤氏の講話に関する4年生の感想のテキストマイニング(スコア/出現頻度)

名詞	ネパール (183.21/35)	支援 (29.66/23)	現状 (15.29/18)	教育 (14.18/14)	活動 (5.14/14)	大切 (4.24/14)
	お話 (3.31/14)	バディ (26.58/12)	子ども (5.43/12)	族 (14.43/42)	人身売買 (54.45/10)	売春 (43.12/10)
動詞	思う (3.97/84)	できる (3.64/54)	知る (4.34/42)	考える (3.42/35)	学ぶ (3.09/8)	
形容詞	貧しい (2.18/2)					

表1は、佐藤氏の講話に関する4年生の感想(n=25)のテキストマイニングである。マイニング結果の名詞には、ネパール、支援、現状、教育などのほか、人身売買や売春、貧しい、等がキーワードとして挙がっている。このようなキーワードが上位に挙がっている理由は、バディ族がネパールのカースト制度の最下層に属しており、教育、医療、社会的地位、戸籍すら与えられず、住所が存在しない河原に住み、バディ族の女の子達は、10歳前後で売春婦となり売春を始めることでお金を得るか、売られることで家族がお金を得ることができるか、という選択しかない人々の子ども達をゴスペルエイドは救出、保護し、教育や農業や裁縫などの技術を与えている話を、実際に佐藤氏の口から聞いたことであると考えられる。4年生の感想には、「支援をしたい」、「子どもたちが学ぶこと」、「教育の大切さ」、「自分ができること」等のフレーズが挙がっており、今後保育者や教育者として何かしていきたい、という気持ちが表れていた。また、「自分は恵まれていることに気づいた」「当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったことに気づいた」「日本より外の国を知ろうと思わなかった。これからは視野を広げていきたい。」という記載も見られ、自己の国際的な視野の狭さへの気づきを得ていた。

近藤(2016, pp. 41-42)⁹⁾は、地域における開発教育は、多くの場合には、ワークショップやセミナーで行われ、短い時間的制約があることにより、ファシリテーターは、遠い地域についての現状伝達に留まり、参加者も遠くで起こっている悲惨な現実に対し、可哀そう、助けてあげなければ、という発想をもつところに着地すると述べている。しかし、開発教育の目的は、遠くで起こっていることと、身近で目にする事との繋がりを構造的に理解することにより、遠くで起こっている悲惨な現実に対し、自分達は現在どのように関わっており、理解した上で、どう打開していけるのか、を考えられることであると近藤は説明している。「理解した上で、どう打開していいけるのか」を考えるためには、更に踏み込んだ活動へ繋げるためのビジョンが必要である。近藤も著書の中で Think globally act locally という言葉を使用しているが、世界を見て、地域でできる活動をする。学生がビジョンをもつための手助けを教員が少しすることで、学生は自発的に、地域に向けた活動を始めることができるのではないだろうか考える。

(3) SDGs の理解度の変化について

SDGs の内容を知っていると回答した学生(n=102)の、イベント前後のSDGsに関する知識の自己評価を比較したところ、SDGs の内容について「詳しく説明できる程度」がイベント前が4.9%だったのに対し、イベント後には、5.9%へと1.0%微増した。「少し説明できる程度」は、イベント前の60.8%からイベント後には、81.4%と20.6%増加し、「ほとんど説明できない」がイベント前の33.3%からイベント後の12.7%に20.6%減少した。「全く説明できない」1.0%はイベント後には0.0%となった。

学年別に見ると、イベント前後で「少し説明できる程度」が1年生が0%、2年生が12.2%、3年生が25.0%、4年生が61.1%増加した。また、4年生は、「全く説明できない」と回答した1名が「少し説明できる程度」へ移動したことにより、イベント後には、「少し説明できる程度」が100%となった。1年生のみイベント後に、「詳しく説明できる程度」が1名分増加した。

スタンプラリーでは、出題者がクイズ形式で、1人に対して1問出題をした。スタンプラリー参加者は、1対1の対面形式で、少なくとも7問のクイズに回答したということになり、短時間で有意義な学びが得られたことが、理解度の変化に繋がったと考えられる。

また、4年生の「ほとんど説明できない」の55.6%と全く説明できないの5.6%がイベント後には、「少し説明できる程度」へ移動し、全員が「少し説明できる程度」となったのは、スタンプラリーのクイズに加え、国際協力の経験者である佐藤氏の講演を聞いた効果が大きかったことを示していると推測される。

表2. イベント前のSDGsに関する知識とイベント後の知識の自己評価の比較 (n=102)

	イベント前				イベント後			
	詳しく説明できる程度	少し説明できる程度	ほとんど説明できない	全く説明できない	詳しく説明できる程度	少し説明できる程度	ほとんど説明できない	全く説明できない
1年生	0.0%	87.0%	13.0%	0.0%	4.3%	87.0%	8.7%	0.0%
2年生	9.8%	56.1%	34.1%	0.0%	9.8%	68.3%	22.0%	0.0%
3年生	5.0%	60.0%	35.0%	0.0%	5.0%	85.0%	10.0%	0.0%
4年生	0.0%	38.9%	55.6%	5.6%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
全体	4.9%	60.8%	33.3%	1.0%	5.9%	81.4%	12.7%	0.0%

(4) 今後のSDGs活動への参加意識について

「今回のSDGsイベントで、SDGsへの関心がどの程度変化しましたか？」という質問については、98.6%(n=141)の学生が「とても関心が増えた」、「少し関心が増えた」と回答し、「今回のSDGsイベントによって、SDGsに関することを調べてみようと思いましたか？」という質問については、94.3%(n=141)の学生が「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した。「今回のSDGsイベントによって、自分でも何かSDGsに関する取り組みでみようと思いましたか？」という質問についても、95.1%(n=141)の学生が「とてもそう思う」、「少しそう思う」と回答しており、スタンプラリーに参加した学生が全体的にSDGsへ関心を高めた結果となった。

学生が個人でできるSDGsの取り組み例の自由記述には、「食品ロスをなくすこと」に関する記述が21、「節電」に関する記述が16、「節水」に関する記述が14、「バディカフェに行く」などの記述が13、「ごみ削減」が10、「募金」が9、「エコバッグを使用する」が8、「SDGsについてもっと知る」などの記述が5、「寄付」及び「SDGsを伝えること」が3、「水筒を使用する」「分別する」「リサイクルをする」が2、そのほか、「ごみ拾いをする」「世界のことを一日一回考えてみる」「ネパールへ行ってみよう」などの記述が見られた。自由記述にある食品ロスは「SDGs2の飢餓をゼロに」の項目、節水は「SDGs6の安全な水とトイレを世界中に」の項目に当てはまり、回答数も多かったことから、スタンプラリーでの学びが反映されたものであると考えられる。

「岡崎女子大学の学生として、やってみよう取り組みやプロジェクトなど」の自由記述については、「バディカフェに行く」が8、「節電」が5、「ジェンダーについての取り組み」が4、「節水」と「募金」が3、「貧困について考える」「子ども食堂」「服を寄付」が2であった。そのほか、「SDGsの今の現状を多くの人に伝える遊びを考える」「SDGs週間(SDGsのことを実行しよう！みたいなもの)」「教育が受けられない子がいることを軽減できるように考える、グループワーク」「子どもの貧困について」「チャイルドスポンサーシップ」「タブレットを授業で使用し、紙の使い過ぎを防ぐ」「子育て支援におけるジェンダーギャップをなくせるような取り組み」「SDGsに向き合い、取り組む大学・大学生として県内一番に

なること」「岡崎女子大学エコバッグデザインして売る。売上金何パーセントか援金」「ネパールの現状を女性の視点で伝える。バディカフェのものをかわいく写真をとって、インスタにあげる。」「ネパールへ行って、子どもと触れ合いたい」など、様々な記述が見られた。子ども、子育て、チャイルド、ジェンダーなどのキーワードが見られ、保育・教育を専攻する女子大学生の特徴が伺われた。

今回の SDGs イベントに関する感想をテキストマイニング(ユーザーローカルを使用)したところ、スコア、頻出頻度共に大きかった名詞は、「SDGs」「クイズ」「世界」「スタンプラリー」「世界」「関心」「バディ」であった。動詞では、「知る」「できる」「知れる」「学ぶ」「学べる」、形容詞では、「楽しい」「分かり易い」であった。

表 3. SDGs イベントに関する学生の感想のテキストマイニング(スコア/出現頻度)

名詞	SDGs (279.86/23)	クイズ (21.02/21)	世界 (3.03/18)	スタンプラリー (40.05/14)	関心 (6.37/7)	バディ (4.59/4)
動詞	知る (5.64/48)	できる (2.22/42)	知れる (5.23/12)	学ぶ (5.59/11)	学べる (11.98/7)	
形容詞	楽しい (3.13/37)	分かり易い (17.10/5)				

学生のコメントとして、「スタンプラリーのクイズを通し、楽しく学ぶことができた」「説明が分かり易かったことと、クイズ形式だったため、SDGsについて簡単に楽しく知ることができて良かった」「世界の子どもたちの生活について知ることができた」「バディ族の動画を見て、私の生きる世界がどれほど恵まれているか実感した」「話をしたり、スタンプラリーなどをして、強制的でない感じが良かったです」など、113名の記述があった。

上述したとおり、スタンプラリー形式をとったことにより、短時間ではあるが、少人数での学びが効果的であったのではないかと推測される。また、1つのブースにおいて、10種類程の問題があったことから、各ブースにおける出題がマンネリ化しなかったことも良かった点であると考えられる。

(5) 実行役であった学生の学びについて

今回のスタンプラリーイベントでは、筆者のゼミナールを受講している学生が実行役となった。この学生達が国際理解やSDGsに関する学びを通して、グローバルな視点をもつことを今回の学びの目標としていた。学生の自己評価の結果としては、国際社会に関する知識(表4)は全体的に増加し、国際的な視野(表5)は増加しなかったことにより、国際社会に関する知識は増えたが、国際的な視野は広がらなかったという結果となった。

文部科学省(2021)¹⁰は、国際的な視野を持つグローバル人材を育成するため、小・中・高等学校を通じた外国語教育の強化、高校生の海外留学の促進、国際理解教育の推進等に取り組んでいる。一方で、新型コロナウイルス感染症の影響により、海外留学が難しい状況が続くことから、オンラインでの国際交流事例を収集し、異文化理解や国際的視野の涵養に資する取組を文部科学省は紹介している。この他にも外国人高校生の招致を通じた国際交流を行っており、異なる同世代の若者が交流を深めることで、異文化を理解し、広い視野を持つことに繋がるとしている。今回行った活動は国際理解教育の範囲であり、更

に国際的視野を広げるためには、海外へ留学したり、外国から若者を招致したりと、実際に外国人と触れ合うことが必要となることが考えられる。これは次回への課題となる。

表 4. 国際社会の現状に関する知識について

	国際社会の現状（国際社会における貧困や教育の問題、その他）についての知識はどの程度ありますか。			
	沢山ある	まあある	あまりない	全くない
授業開始時 (n=13)	1	5	7	0
イベント前 (n=14)	1	9	4	0
イベント後 (n=14)	1	8	5	0

表 5. 国際的な視野について

	国際的な視野はどの程度あると感じますか。			
	広いと感じる	まあ広いと感じる	あまり広くないと感じる	全く広くないと感じる
授業開始時 (n=13)	2	4	7	0
イベント前 (n=14)	0	7	5	2
イベント後 (n=14)	1	5	7	1

「今回のイベントは、就活や就活後の人生にどのような影響を与えたと思いますか」という質問について、「(省略) 世界のことについて、私をもっと興味をもってインプットして、子ども達にいざという時にアウトプットさせていきたい」「子どもたちに対しても、SDGs のことや世界についてのことを話すことができる」「自分たちの世代だけでなく、子どもたちへつなげていきたい」「就活後、子どもの貧困についても考えて関わっていきたい」という、保育者や教育者の視点としての回答が多く見られた。このような回答は、参加者 1 のやってみたい取り組みやプロジェクトなどの自由記述にも散見されたことから、今後 SDGs に取り組む際に、子どもや教育を中心としたテーマを中心として扱っていくことが必要であると考えられる。

「今回のイベントを通して、もっと学んでいきたいと思ったことがありましたらお書きください」という質問には、「まだまだ世界のことを理解していないと感じました。もっと視野を広げていきたいです。」「さらに細かな SDGs 問題に目を向けて、自分には何ができるか考えたい。」などの、「世界の現状をもっと知りたい」という回答が多く、上述したとおり、世界的視野は広がらなかったと学生が自己評価をしてはいるものの、自由記述では、世界をもっと知ってほしいという意識の広がりを見ることができた。

また、筆者ゼミナールの 3 年生は、教育フォーラムの発表の中で、世界を学ぶうちに日本への関心が増したこと、コロナ禍で日本における多くの人々に影響が出ており、特にひとり親世帯への影響が大きこと日本にも助けを必要としている子どもたちがいることから、将来教育者や保育者になった際に、困っている子ども達への支援を考えていきたいと述べている。上述した、1996 年のユネスコの報告書における、現代社会で自らを取り巻く環境の種々の側面を理解するようになれば、(中略)現実を直視することができる、の解釈として、保育士、教育者を目指す学生の場合には、園や学校に通う家庭や子ども達の状況は様々であるという現実を知り、それを現実のものとして受け止めることができるということではないだろうか。学生はこの部分で達成ができたのではないかと考える。

(6) ゴスペルエイド、バディカフェのスタッフの方々の見解

今回の岡崎女子大学との関わりについて、ゴスペルエイド代表の佐藤美香氏、バディカフェのスタッフの方々より、質問紙調査にて自由記述の回答を得た。

佐藤氏は、今回の講義を通し、学生が佐藤氏の話当真に受け止めようとしていた姿、教員が学生に伝えようとする姿、そして、寄付などの協力について全てが、活動への大きな励ましになり、活動への自信や意欲にも繋がったと述べている。また、大学時代は、社会の中でのあり方を決定づける期間であることから、ゴスペルエイドやバディのことを知ってもらうことで、将来的に日本や世界における社会問題への取り組みに貢献する人材の育成に繋がるということ。特に、保育士や教員の養成校には、教育・福祉に関わっていく学生が在籍することから、学生が広い視野と志を高く持つことはとても大事なことでであると述べている。

バディカフェスタッフの方々は、苦しい環境に飲み込まれず、時代を変えようと立ち上がった若い女性たちから生まれたプロダクトは、バディの誇りであり、若い彼女たちの生き様自体がバディカフェのブランドであることを、バディの女性達と同年代の学生に知ってもらい、理解し、考えてもらうことが学びの意義である。また、自分が見聞きし知っていると思っている事は、ほんの一部であり、ニュースでは伝えられない事実があることから、ネパール・バディ族の現状をゴスペルエイドの働きを通して知ること、学生の視野がより広がること、国・政府・人種により様々な価値観があること等の、世界における価値観の違いを知ること。また、学生が自分にできることは何かを考えたり、行動したりすることを通して、視点を自分から他者に向けてことができるようになることが自分達の活動を大学生に伝えていく意義であると述べている。

甲斐田・南雲(2016)¹¹⁾は、開発教育を子ども・若者を対象として実践する場合、子ども・若者は、学習者であると同時に、公正で持続可能な社会を実現する主体として尊重されるべきであり、大人が彼らの主体的な参加による社会変革の可能性を信じることで、子どもや若者が公正な地球社会づくりに参加しやすくなり、それがSDGs達成へと繋がると述べている。ゴスペルエイド、バディカフェの方々は、学生の社会への主体的な参加者になることを期待、尊重しており、そのような姿勢で活動をしていることが、ネパールにおけるバディ族の子どもの救済を実現できているのであると考える。

先述したユネスコの報告書の中の「批判精神」について、岩崎(2002)¹²⁾は、クリティカル・シンキングとは、ただ情報や意見を鵜呑みにせず、批判的に吟味し検討する思考であると述べている。国立教育政策研究所(2018)¹³⁾は、2018年のOECDの報告書における、中学校の授業で批判的思考を取り扱う割合では、OECD加盟国の中で日本は最下位であると報告している。ニールセンは、高橋(2021, p. 82)¹⁴⁾の著書の中で、デンマークの持続可能性や民主主義の根底にあるものは、教育とジャーナリズムであり、批判的思考の教育における育成について日本と比較すると、幼少期からの教育の姿勢に違いがあると述べている。具体的には、デンマークでは、「親や教師、政府が言うことが必ずしも正しいとは限らないから、いったん自分の頭で考えたり、自分で調べたりしてみよう。」と教えており、大人が子どもの批判に応える姿勢のある社会が形成されていると説明している。

学生の社会への主体的な参加の尊重も大人の子どものからの批判に応える姿勢に共通するのは、子どもを信じることや寛容性である。その先により良い教育、より良い活動が生まれると考える。

6. まとめと今後の課題

本研究は、サンプル数が少数であったため、一般化することは難しいが、岡崎女子大学におけるSDGsに関する認知度については、全体(n=141)の89.4%がSDGsという言葉を知っている

たことがあり、70.9%が大学の授業、高校の授業、テレビなどによってSDGsの内容を知っていることが明らかとなった。3年生と4年生においては、筆者以外にも授業内でSDGsを取り上げている教員がいることが明らかとなり、教員から授業内でのSDGsについての取扱い内容を集め、集約をすることにより、岡崎女子大学におけるSDGsの取り組みを方向づけることができるのではないだろうかと考える。また、特に教養科目において、SDGsを使い他教員が教える科目との関連付けなどを行うことにより、横としての科目の連携を生むことはできないだろうかと考える。

SDGsの内容を知っていると回答した学生(n=102)の、スタンプラリーイベント前とイベント後のSDGsに関する知識の比較では、「詳しく説明できる程度」「少し説明できる程度」がイベント前に65.7%であったのが、イベント後に87.3%となり、参加したうちの21.6%に、SDGsの内容に関する学びがあったことが明らかとなった。また、回答した141名うち、95%前後の学生がスタンプラリーイベント参加前に比べ、SDGsへの関心を高め、自分でSDGsに関することを調べてみたり、取り組んでみようと考えていた。具体的に大学で行ってみたい取り組みやプロジェクトへの自由回答には、「バディカフェに行く」、「ジェンダーについての取り組み」、「子ども食堂」、「募金」、「貧困について考える」などが主に見られたほか、「節電」、「節水」などは、個人で行いたい取り組みの記述にも見られた。「節電」、「節水」は、すぐにでも取り組むことができるため、SDGsに関連させた「節電」「節水」を学生活動の一つとして提案ができると考える。岡崎女子大学では、「子ども食堂」の活動がゼミナール単位の活動として3年程前から行われていた。厚生労働省(2019)¹⁵⁾の『2019年 国民生活基礎調査の概要』には、2018年の子どもがいる現役世帯の相対的貧困率は、12.6%で、ひとり親家庭では48.1%と明記されており、ひとり親家庭における子どもの貧困が報告されているなど、子どもの貧困率に社会的な課題があることや、学生が子どもに関心があることから、社会貢献となる「子ども食堂」の取り組みを通じた学生の学びの場の広がりについて、今後提案していきたいと考える。

SDGsスタンプラリーに参加者の感想をテキストマイニング(ユーザーローカルのものを使用)したところ、スコア、頻出頻度共に大きかった単語は、「SDGs」「クイズ」「世界」「スタンプラリー」「世界」「関心」「バディ」「知る」「できる」「知れる」「学ぶ」「学べる」「楽しい」「分かり易い」などが主に挙げられ、スタンプラリーイベントを通し、参加学生がSDGsを楽しみながら学ぶことができ、世界にも目を向けることができたことが明らかとなった。

実行役となった筆者のゼミナール受講生は、この活動の準備を通して、国際的な知識を増やすことはできたが、国際的な視野を広げるまでには至らなかった。しかし、参加者と同様、世界で起きている事柄に目を向けていきたいという意識の芽生えはあった。国際的視野を広げるという更に上の段階に進むには、外国へ行く、外国人を招聘するなどの外国人との実際に関わりや行動が必要になってくることが考えられ、今後の課題となる。

ゴスペルエイド代表の佐藤美香氏、バディカフェのスタッフの方々から、今回の大学との関わりの全てが、活動への大きな励ましになり、活動への自信や意欲にも繋がったとともに、今回の学生の学びが社会への貢献へ繋がってほしいという願いが込められていた。コロナ禍が収まった後には、ネパール支部で働いているバディの女性を一人岡崎へ招聘するという話も口頭で伺っており、来日される場合には、多くの学生へ向けた講話をお願いしたい。

保育系、教育系の大学においてSDGsの普及を行うプログラムの提案として、一つ目に、SDGs17の目標全てを取り上げるのではなく、子どもや教育に関連するものを学びのテーマ

として取り上げること。二つ目に、経験者による講演や参加型の活動が効果的であったことの二点が挙げられる。また、今回の結果を元に、論文や著作を調査した結果、日本において行うイベントの際に、参加する学生の国際的視野の拡大を狙う場合には、外国人との触れ合いを推奨することや、学生の社会参加への主体性を尊重することが学生の地域貢献活動に繋がるのが提案事項となると考えられる。ほか、技術的な側面として、ポスター等の掲示物を使用した啓発活動を行う場合には、立ち止まって読んでもらうための工夫が必要となることを、今回の研究で得られた結果として提案したい。

付記

本研究は、令和3年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査No. 57の承認を受けて実施している。

注釈

- (1) 特定非営利活動法人ゴスペルエイドは、岡崎市細川町を本拠地とし、人身売買・強制売春の被害女性、子どもなど社会的弱者に対し、職業訓練・雇用創出・教育的支援・金銭的支援等の事業を行い、被援助者が将来的に社会的な地位を確立し、自立できるような活動を行っている(内閣府, 2021)¹⁶⁾。
- (2) 2017年にゴスペルエイドが開設した支援カフェ(Gospel Aid, 2021)¹⁷⁾。
- (3) 売春を伝統的生業とする不可触民と呼ばれており、出生登録証や市民権証を得ることができず、子ども達は学校に入学できないという問題を抱えている(藤倉, 2016)¹⁸⁾。
- (4) ユーザーローカル テキストマイニングツール <https://textmining.userlocal.jp/> による分析。

引用文献

- 1) UNESCO(2013) Inclusive Education、 <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf00-00222124> (2022年2月14日最終閲覧)
- 2) SDGs推進本部「SDGsアクションプラン2021～コロナ禍からの「よりよい復興」と新たな時代への社会変革～」 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs-/pdf/SDGs_Action_Plan_2021.pdf (2022年1月27日最終閲覧)
- 3) 前掲2)
- 4) 前掲2)
- 5) 文部科学省「持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)」 <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm> (2022年1月27日最終閲覧)
- 6) 田爪宏二・高垣マユミ「教員養成大学の学生におけるSDGsに対する認識」『日本教育心理学会 第61回総会発表論文集』2019年、493頁
- 7) 田爪宏二・高垣マユミ「女子大学の教員養成におけるSDGsに対する認識と講義による変容」『日本教育心理学会 第62回総会発表論文集』2020年、166頁
- 8) 山中美子・畠中徳子「保育者養成における国際理解教育の必要性について II—保育者養成におけるカリキュラム開発:実践例からみる授業方法の再検討とその効果について—」『立教女学院短期大学紀要(38)』2006年、119-139頁

- 9) 近藤牧子「地域における開発教育の展開」田中治彦・三宅隆史・湯本浩之(編)『SDGs と開発教育』学文社、2016年、38-56頁
- 10) 文部科学省「第4章 初等中等教育の充実」『令和2年度 文部科学白書』2021年
- 11) 甲斐田万智子・南雲勇多「子どもと若者」田中治彦・三宅隆史・湯本浩之(編)『SDGs と開発教育』学文社、2016年、214 - 234頁
- 12) 岩崎豪人「クリティカル・シンキングのめざすもの」『京都大学文学部哲学研究室紀要(5)』2002年、12-27頁
- 13) 国立教育政策研究所「教員環境の国際比較：OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018 報告書—学び続ける教員と校長—の要約」2018年
- 14) 高橋真樹『日本のSDGs それってほんとにサステナブル?』大月書店、2021年
- 15) 厚生労働省『2019年国民生活基礎調査の概要』
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/d1/03.pdf>(2022年2月14日最終閲覧)
- 16) 内閣府「内閣府NPOホームページ」<https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/023002251>(2022年2月14日最終閲覧)
- 17) Gospel Aid 「History ゴスペルエイドの歩み」、<https://gospel-aid.org/history/>(2022年2月15日最終閲覧)
- 18) 藤倉康子「出生登録における「父親」の存在と不在 西ネパールの市民権証取得運動の事例より」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集 日本文化人類学会第50回研究大会』2016年、C04頁

参考等文献

- ・池田香代子『世界がもし100人の村だったら』マガジンハウス、2001年
- ・池田香代子『世界がもし100人の村だったら 子ども編』マガジンハウス、2006年
- ・池田香代子『世界がもし100人の村だったら お金篇—たった1人の大金持ちと50人の貧しい村人たち』マガジンハウス、2017年
- ・開発教育協会『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』開発教育協会2016年

謝辞

本研究に御協力頂きました、ゴスペルエイド及びバディカフェの皆様、研究に関わって下さいました全ての方々に心より感謝を申し上げます。